

## 「思いかた」の練習

豊田 一秀

い、紙から離れてしまうのです。このほほ笑ましい光景の中で、この子は自分の思ひ方が間違っているという事実に直面しています。

子どもをよく観てみると、思いかたの練習は、もつと、ずっと幼い時から始まっている事に気付きます。たとえば、赤ちゃんはベビーチェアーからくり返し、くり返しスプーンを落としては遊んでいます。赤ちゃんは、手離せばスプーンが手の中から下に落ちて行く事を発見したのです。そしてスプーンを下に落とそうと思うのなら、手を開けばよいという道理を楽しみ、確かめているのです。このように、物を思い通りにあやつれるという認識の中から、幼ない人たちも自分の意志の存在と自己有用感の第一歩を得ているのだと思ひます。

この場合、正しく思ふとは、自然界の法則を知る事を意味します。水たまりに葉っぱを浮かべて子どもが遊んでいます。でも、もしも石ころを浮かべようと思つても、決して思い通りにはならなかつたでしょう。ざるで水をくもうと思っても、それは無理なのです。自然は時

ひとりの子どもが困った顔をして私の所にやってきました。どうしても思うように絵が描けないと言います。「ぼくは、さつきからパイプ（喫煙用の）の絵をかこう」としているんだけど、途中からどうしてもだめなんだ」とその子。見ていると横に線を引いてゆき「ここまではいいんだけれど、曲がるところからどうしてもかけなくなっちゃうんだよ」と言いながら、ペンを紙から垂直に空間上に持ち上げています。パイプの首は確かに上に向いています。その子もそのように描こうと思うのですが、そうするとベン先はどうしても空中に上がってしま

をかえ、品をかえ、子どもたちに正しく思うことを教えてくれています。自然は子どもに対して少しもゆずつてはくれません。どんなに泣いて怒つても、下に落ちてしまつたスプーンはテーブルに戻つて来てはくれませんし、石は水に浮いてはくれないので。そのかわり、子どもがひと度思いかたをかえ、法則を見出せば、自然はたちどころに子どもの思い通りに応えてくれる存在へとその姿を変えます。

さて、自然や物に比べて、人間（友だち）はなんといかたの難しい対象でしょう。遊ぼうと思つて、いつもお父さんにしているようにちょっとついただけなのに、泣いてしまう友だちも、いれば、本気で怒つてしまふ友だちもいるのです。石や葉っぱは、どれだけポケットにつめ込んでもおとなしく納まつていってくれますが、友だちはそうはいきません。砂場はいつも自分を待つ存在であつて、砂場の方から自分に迫つては来ませんが、友だちは思いに反して向うからやつて来る時があります。積木はつむのも、こわすのも思いのままですが、友だち

は自分に指図しようとするのです。友だちは、思い通りにはなりません。もしも友だちを思い通りにしたいのなら、どうしても自分の思いかたの方を修正したり、また自分の思いかたを相手に分かるように伝えなくてはならないのです。

自然界や物質について正しく思うという事は、それらの法則や道理を正しく理解する——子どもの場合は、身体で会得する——事でした。一方で、人間（友だち）に對して正しく思うということは、どういうことなのでしょうか。それは、相手の立場に立つて考える事ができるということではないのかと私は考えます。そして、子どもがそう考えられるようになるためには、前提として、どうしても子ども自身が「自分は受け入れられ、尊重されている」と思えるような、大人のささえが必要なのです。それは家庭では両親の、そして幼稚園では教師の役割です。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）